

# 大聖堂のある街で

第8話 ここよりも、もっと深いどこか



堀田耕介

## 大聖堂の大平原

気がつくときぼくは草原にいた。風が吹いていた。知らない場所だった。はじめてカスミとキスをした、エリオットの丘の草原に似ているような気もしたけど、違う場所だった。ヒースが揺れていた。ぼくは一人だった。

「カスミちゃん？」

カスミはいなかった。でもぼくはなぜか、カスミはきっと近くにいる、と思った。ぼくはあたりを見回

した。緑の森があつて、その向こうに湖がある。その手前に何本かの木立。ぼくはなぜか心ひかれて、そこに向かつて歩いて行つた。一歩歩くたびに風景が変わる。ここは夢の中なんだろうか。そうかもしれない。ぼくは歩いた。

木立まで行くと、そこにリカが立っていた。

「こんにちは。」

「こんにちは。リカ、なぜここに？」

「なぜここについて、私が聞きたいわ。ここは私たちの

世界なんだから。何でユキちゃんがここにいるの？」

「何でって……」

ぼくはなぜここにいるのか考えてみたけど、分からなかった。

「……わからない。」

リカは吹き出した。

「もう、しょうがないわね。」

「でもリカ……」

「なあに？」

「うん、えーと」

「何かしら。」

「君って、そんなに大きかったっけ？」

ここにいるリカは、なぜかぼくとあまり変わらない身長で、5年生くらいの女の子に見えた。かっこいいトレンチみたいなワンピースを着て、バシツとしたバックルのついた太いベルトをして、頭は毛先のとがったおかつぱ。ミニスカートの裾から、かっこいい足が伸びている。

「だから言ったでしょ、ここは私たちの世界だって。私たちはここでは、どんな年齢にもなれるの。あな

たたちの世界に行ったときは、本当の姿を見せな  
きやいけないけど。」

「じゃあ君は、本当はもっと小さいということ？」

「そうよ。」

「でも君は、865歳って…」

「ふふ。本当はね、この世界では年齢なんてないの  
よ。だから一番年を取って見たとき、865歳にな  
ったの。でも今は、ユキちゃんとデートしたいから、ユ  
キちゃんと同じくらいあんな年齢になってみたわけ。ど  
う？気にいってくれた？」

「うん。かつこいいよ。」

「そうでしょ。私、やればできるタイプなんだから。」  
「でもやらないでしょ」

「そうなのよ。なかなか本気出せなくて。」

「それも実力のうちって言うよね。」

「いじわる言わないでよ。もう。」

リカはぼくの手を取った。

「どこか行きましょう。あの湖がいいわ。太陽の光を浴びて、きらきらしてる。」

ぼくは何か忘れ物をした気がした。でもそれが何

か思い出せない。

ぼくたちが湖のほとりに行くと、そこには神話のような白いキトンを着た女の人たちが列を作った。静かに湖の周りをまわっていた。リカは何かの歌を、静かに口ずさんでいる。リカが行くと、女の人たちは立ち止り、ぼくたちに道を開けた。

「こっちに来て。」

ぼくはリカと一緒にその輪の向こうに進み、波打ち際まで来た。広い湖面に、太陽が静かに反射していた。

「こっちよ。」

リカは靴を履いたまま、湖の中に入って行った。ぼくもそのままついて行こうとした。

「ユキちゃん。」

後ろから声がした。列の中の女の人**が**ぼくを呼びとめた。

「そっちへいったらだめよ。」

ぼくは立ち止った。その人は何かとても懐かしい感じがした。ぼくはその人に近づいた。

「ユキちゃん、こっちよ。」

リカが湖の中で呼ぶ。

「リカ。」

その人が凜とした声でリカを呼びとめた。

「ユキちゃんは、あなたとは違うのよ。」

リカは不満そうな顔をした。

「だから、私と一緒にになってもらおうと思って連れてきたんじゃない。」

「だめよ、おいたをしちや。」

女の人は優しく微笑んだ。

「ちえ。」

リカは水面に浮かんでいた。と、突然水面の下から、大きなライオンが現れて、一声大きく吠えた。あたりを圧する、おそろしい咆哮だった。湖の周りの女の人たちは、みなひざまずいてライオンに敬意を表した。リカはやすやすとライオンに近づき、ライオンにまたがってしまった。

「ねえライオン。」

ライオンは唸った。

「あのね、ママがね、ユキちゃんをここに呼んだらいけないっていうの。どう思う?」

ライオンは少し強く唸った。

「でもさ、私ずっとユキちゃんのこと待ってたんだよ。せっかく会えたんだから、ずっと一緒にいたいじゃない。」

ライオンは前足でリカの形の良いふくらはぎに触れた。

「痛いったら。ねえライオン、いいでしょ、ユキちゃんここにいても。」

ライオンはもっと強く唸った。

「痛い痛い。分かったったら。もう、つまんないわ

ね。」

ライオンは湖の中から岸に上がり、ぼくの前に立った。目の前に立って分かったがそれは体の高さが3メートルはあろうかという巨大なライオンだった。まるで神殿のように、そのライオンは壮麗に見えた。ぼくは不思議に怖くはなかった。

「ライオンがね、ユキちゃんはここにいちやいけないうて。」

「ここについて？」

「この世界によ。本当はこの湖の中に入ったら、ず

つとここにいらられるようになったのよ。でもママもライオンもユキちゃんはここにいたらだめだっていうから。仕方ないわ。残念ね。」

ぼくは何を言われているのか分からなかった。

「だから私はここでお別れだわ。またどこかで会うかもしれないけど。」

「そうなの？」

「うん。だからずっと元気でいてね。私のこと、忘れないでね。」

「ぼくは、ここにいたらいけないんですか」

ぼくはライオンに尋ねた。

「お前は、ここに何をしに来た？」

「何をしに来たって……」

ぼくは思い出せなかった。その時急に、カスミの言葉が頭に浮かんだ。

「ぼくは、お母さんに会いに来ました。」

ライオンは笑った。そして、湖の周りの女の人たちも一斉に笑った。

「思い出したか。心の中は広くて深い。一度忘れてしまったら、もうどこに行ったか分からなくなる。」

だから大切なことは忘れずに覚えておくんだよ。  
大切に。大切に。」

リカはライオンから飛び降りて言った。

「ユキちゃん。このライオンの前足の間を通って。」  
ぼくはリカを見た。

「この向こうに、あなたのいくべき場所がある。」

「この向こうに？」

「そう。」

風が吹いてきた。時間が迫っている。それがぼくにはわかった。

「分かった。じゃあぼく、行く。」

「元気でね。」

ぼくはリカがママと呼んだ女の人を振り返った。その人はとても懐かしい顔でぼくに向かって微笑んでいた。

「あなたはぼくの……」

そこまで言ったとき、急に突風が吹いて、ぼくはライオンの前足の間に吸い込まれて行った。

「バイバイ、ユキちゃん。」

リカの声が、どこかで聞こえた。

気がつく**と**ぼくは、また草原に立っていた。ここはどこだろう。でもさっきの草原とは違っていた。ぼくの意識は、さっきよりはつきりしている感じがした。目の前には、大きな二つの建物があった。それは旧市街にあるはずの大聖堂と、新市街にあるはずの市庁舎だった。なぜこの建物たちがこんなところに？不思議に思ってぼくは大聖堂のところに歩いて行った。

「ユキちゃん。」

振り向くとそこに、カスミが立っていた。多分カスミなのだと思う。現実のカスミより、ずっと大人びて見えた。

「ユキちゃん、どこへ行ってたの？」

「どこへってぼくは…」

さっきまでのことを、ぼくはちゃんと思い出すことができなかった。

「今までぼくは、どこにいたんだろう…」

カスミは微笑んだ。

「ここよりも、もっと深いどこかへ行ってしまっていた

のね。帰って来られてよかった。」

「ここはどこなの？夢の中なの？」

カスミは首を振った。

「ここは夢の中ではないわ。確かに存在する場所。

でも、人にはわからない、そんな場所よ。」

「これは、何なの？大聖堂？」

「そうよ。」

大聖堂の扉が、音もなく開いた。

「行きましょう。」

カスミは中に入って行く。

「カスミちゃん！」

カスミはぼくを振り返った。

「カスミちゃんはどうして、そんなに大人っぽくなってるの？」

カスミはぼくに微笑んで言った。

「私だけじゃないわよ。」

ぼくははっとした。気がつくのとぼくは鏡の庭にいた。まわりが鏡に取り囲まれていた。ぼくは鏡に映る自分の姿を見た。それは確かに自分なのに、そこにいるのは少年というよりはもっと大人の姿をしたぼ

くだった。

「これは……」

ぼくは大聖堂の前に戻っていた。

「わかった？」

「ぼくは大人になったの？」

「ううん、ここでは、その人の本当の姿になっているの。」

「これが本当のぼくの姿？」

「そうよ。行きましょう。」

ぼくはカスミについて、大聖堂への扉をくぐった。

大聖堂の中は、大きな空間だった。明るい光が降り注いでいて、ぼくは上を見上げた。空間はどこまでもどこまでも続いていて、その明るい光がどこから降り注いでくるのか、ぼくにはわからなかった。その広い空間の周りには階段があつて、ぼくはその空間の真ん中の、渡り廊下のような場所にいた。壁には一面、ステンドグラスから漏れる光によつて描かれたような、でも確かに実在感のある絵が克明に描かれていた。下をのぞくと、どこまでも深い

闇に向かつて空間が開かれていた。そこにも絵が描いてあり、階段があった。どこまで続いているのか分からなかった。

「ぼくたちは、どこにいるの？」

ぼくはその風景に圧倒された。カスミは言った。

「私たちはどこまでも高い場所から、どこまでも下の場所まで続く空間の、今という踊り場にいるの。」

空間は、透き通っていた。高い明るいところは澄みきって純粹な光に満ちていた。下の方は闇が濃

くなつていくけど、不思議に澄みきった、夜のよう  
な闇だった。どこにも混じりけのない、純粹な暗さ  
だった。

ところどころにいつか見た夕陽のような暗いオレ  
ンジの光があった。その光にはどこかぞつとするよう  
な寒々しさがあった。

「ぼくたちは天国と地獄の間にいるの？」

ぼくはカスミに尋ねた。カスミは首を振った。

「天国も地獄もないわ。ここはただの空間。高いと  
ころに純粹な光があり、低いところに純粹な闇が

ある。ここは世界の外側。だから、世界がどうなっているのか、知ることができる。」

ぼくは壁の絵を見た。そこには知っている人も知らない人もいた。お父さんが市庁舎の屋根から落ちるところも描かれていた。ぼくは見てはいけないうものを見てしまったような気がした。

「ここは……」

「ここは純粋なたましいの世界なのよ。」

「たましいの世界？ たましいの世界は、世界の外側にあるの？」

カスミは笑った。

「そうよ。私たちの世界が、たましいの世界の内側にあるのよ。」

「でもどうしてこんなところにぼくたちが……  
ぼくははつとした。」

「お母さんに会いに行きましょう。」

カスミはぼくの頭の中のカスミと声をそろえて言った。

「お母さんがここににいるの?」

カスミはすつと踊り場を歩きだし、大きな壁につ

いたらせん階段を上って行った。ぼくは壁の絵を見た。誰かの人生の、いつかの一場面がそこに描かれているんだと思った。誰の人生も、波乱と不思議に満ちていた。ぼくは何か、不思議な感動が込み上げてきた。

「カスミちゃん。」

「カスミって呼んで。」

カスミは振り返り、ふっと微笑んで、ぼくの顔を見た。

ぼくはらせん階段を上って行った。そして、またそ

ここに空間の真ん中に通じる渡り廊下があった。

「ここから先はユキが一人で行って。」

ぼくは空間の中心に向かって歩いて行った。空間の中心に、女の人と女の子が立っていた。それは、リカとリカがママと呼んだ女の人、いや、ぼくのお母さんだった。

「お母さん！」

リカは笑いながら渡り廊下を走って行って、どこかに消えた。

「カスミちゃん。」

お母さんは渡り廊下の向こうにいるカスミに向かって言った。カスミの姿は、ぼくにはもうはっきり見えなかった。

「ユキちゃんを守ってくれてありがとう。」

「まりちゃん。」

カスミの声があった。お母さんの名前だった。

「まりちゃんはどうしてここにいるの?」

お母さんはその場でふわりと浮きあがった。

「私は、私の恋人とここに来たのです。」

お母さんは言った。

「お母さんの恋人？」

ぼくは耳を疑った。

「どうということ？本当なの？それは誰なの？」

壁面の、リカが消えた方で声がした。

「ユキ」

聞き覚えのある声だった。ぼくは振り向いた。そこに、リカを肩車した、お父さんの姿があった。

「お父さん！」

リカはお父さんの肩の上ではしゃいでいた。リカの

姿は、ぼくが知っている、いつもの3歳児の姿だった。

「お父さん！お父さんはなぜここにいるの？お父さんは死んじゃったの？」

「大丈夫よ。さつき病院で見たでしょう。お父さんはただ眠っているだけ。あなたたちの家族の、本当の姿が、ここに現れたの。」

「家族の？だってリカは……」

そういいかけると、リカはお父さんの肩の上で手を振って、急に消えた。まるでシャボン玉みたいに。

その時かつん、と足音がした。振り向くとそこに暗い夕陽のようなオレンジの光がさして、その前にえっちゃんが立っていた。えっちゃんはいつもの活発な姿ではなく、黒いドレスを着て、黒い髪を長く肩まで垂らしていた。両手にたくさんの手紙と写真を握り、足元はぶるぶると震えていた。

「えっちゃん！」

ぼくが呼びかけるとえっちゃんは震えが止まり、上を向いて、その場にきつと立って言った。

「まりちゃん、それにかすみちゃん。あなたたちは私のこと、誤解してるわ。」

「誤解？」

ぼくは何のことだろう、と思った。

「あなたたちにもわかっていると思うけど、私、お兄ちゃんのこと、好きよ。」

お父さんが壁の階段で、ゆらゆら、と揺れた気がした。ぼくははっと胸を突かれた。えっちゃんがお父さんに寄せる気持ち、ぼくがカスミを思う気持ちにとってもよく似ていたからだ。

「でも、なにもしてない。何も無いのよ、私とお兄ちゃんの間には。」

リン、とどこかで風鈴が鳴るような音がした。

「でもえっちゃん、あなたの目の中の光には、何かがあったわ。」

カスミが静かに言った。

「分かってるでしょ。」

えっちゃんが悔しそうに言った。

「私はお兄ちゃんが好きなの。だからお兄ちゃんに抱かれないって、何度も何度も思った。でも、我慢

したの。私の最初の記憶は、お兄ちゃんの腕の中  
だった。お父さんでもお母さんでもない、17歳年  
上のお兄ちゃんの腕の中で、私は幸せだった。ずつ  
とこのままいられたらいいって思った。いつもお兄ち  
やんの後ろについて歩いてたもの。他に何人もお兄  
ちゃんやお姉ちゃんがいたけど、お兄ちゃんは一人  
だけ大学も行かないで時計職人になった。私はお  
兄ちゃんが仕事に行くとき、いつもわがまま言って  
困らせたわ。小学校に入る前の冬、お兄ちゃんと  
まりちゃんが結婚した。チャペルで結婚式を挙げた

とき、私はぼんやりした頭でお兄ちゃんとまりちゃんを見ていた。お兄ちゃんの隣にいるあの人は誰？あそこは私のいる場所じゃなかったの？私はまりちゃんにブーケを渡す役だったけど、足がすくんで動けなかった。わかってるわよ、そんなこと。ユキちゃんができて、ユキちゃんが生まれて、私はどこか間違った世界にいるような気がした。まりちゃんがお兄ちゃんと一緒にいるのを見るだけで悲しかった。一人で自分の部屋で泣いた。お母さんはそんな私を見て、何か気付いたのかもしれない。高校生になって、

お父さんが死んでから、旧市街から離れて新市街の白い家の通りに引っ越してくれた。でも、だめ。私の夢の中で、お兄ちゃんへの思いが強くなって行って、夢の中で本当に何度も抱かれたの。そのうちそれが、本当なのか夢なのかさえ分からなくなっていった。だからあのとき、ついお兄ちゃんにキスしてしまっただの。」

どこかでまたリン、という音がした。

「まりちゃんがそれを見ていた、ということはその時には気がつかなかった。でもまりちゃん、その時から

どんどん元気がなくなつた。私はどうしたらいいのかわからなかつた。まりちゃんなんかいなくなつちやえ、という気持ちをも、私は必死で押さええたわ。でも私の体を通り抜けて、私の何かがりまりちゃんを苛んでしまつた。私が悪いの？私がお兄ちゃんを好きで、まりちゃんを恨んでしまつた、私が悪いの？」

どこかでさあつと雨が降る音がした。でもこの空の間の中に雨は降ってはいなかつた。

「ありがとう、えつちゃん。」

お母さんはゆっくりと言つた。

「私、強くなかった。ユウさんとあなたのこと、ずっと信じられなかった。」

お母さんは、お父さんの名を口にした。

「だって、あんなに仲がいいんですもの。でも私、ずっとずっと、ユウさんのことが好きだった。だからユキちゃんが生まれて、とてもうれしかった。でもどこか、えっちゃんとユウさんのことが、いつも頭から離れなかったのね。そして三年前のあの雪が降り出しそうな日。あなたたちが抱き合ってキスをしているのを見た。ううん、ユウさんがただ、妹にキスしているだ

けなのは、本当はすぐに分かったわ。でも、私の心が、目に盗まれてしまったのね。心で信じているのに、目に映ったものが本当なんだと思ってしまった。あの雪の日、子どもを身ごもっていた私は自分の目に負けて傷ついて、心がどこかに行ってしまった。気がついたら私は、ユウさんもユキちゃんも、生まれてくる子どもももなくていい。それでこんなところで、いつまでもさまよっている。」

「いつもそうなんだ。」  
えっちゃんと言った。

「いつもいつもまりちゃんは正しい。いつもまりちゃんは素敵。いつもお兄ちゃんはまりちゃんのもの。どうして？私は、こんなに、お兄ちゃんのことを好きなのに。」

気がつくのとぼくたちは、何もない空間にいた。渡り廊下は夢のように消えて、ぼくたちは宙に浮かんでいた。カスミがその空間をぼくの方に向かって歩いてきた。

「帰りましょう、ユキ。」  
「帰る？」

「もうここは、私たちのいる場所じゃない。」

ゴゴゴゴと何かが動いている音がした。

「カスミちゃん。」

お母さんの声がした。

「まりちゃん。」

カスミが答えた。

「ユキちゃんといってくれてありがとう。」

カスミは頷いた。

空間に、えっちゃん泣き声が響いた。空間全体が夕暮れのようなオレンジの光に飲み込まれそう

になった。でもそれはだんだんと明るくなって、あたかなトパーズ色に変わって行った。すべてがトパーズの光に満たされ、えっちゃんの声は、いつの間にか夢のように消えていた。

気がつくときぼくたちは、大聖堂の外にいた。

大聖堂は、何事もなかったように佇んでいた。そのとき、ぽっと市庁舎に灯がともり、中から活気のある音が聞こえてきた。ぼくは市庁舎を見て言った。

「あの中には何があるの？」

カスミは微笑んで言った。

「夢とか、希望とか、情熱とか。大聖堂がたましいの世界なら、市庁舎はこの世に生きる人たちの、心の世界なのよ。きつといつか、私たちもあそこから、次の世界に歩いて行く。でも私たちは今は、帰らないといけない。」

「心の世界？」

「そう」

カスミがぼくに近づいた。

「カスミちゃん……」

「カスミって呼んで。」

「カスミ」

カスミはまた、ぼくの唇に唇を近づけた。

大聖堂のある街で 第8話 ここよりももっと深い、どこか

<http://p.booklog.jp/book/45632>

著者：堀田耕介

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kous37/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45632>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/45632>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.